

はじめに 石井紘基が突きつける現在形の大問題

石井さんの訃報を聞いたのは、明石^{あかし}で弁護士をしているときでした。忘れもしない二〇〇二年一〇月二五日。旧民主党の衆議院議員・石井紘基^{こうき}は、朝、国会に向かうところを、世田谷の自宅駐車場で、右翼団体代表を名乗る男に刺殺されたのです。

私はテレビのニュースで事件を知り、「えっ、石井さんが!？」とただ驚くばかりでした。すぐに家を出て、東京へ向かいました。

石井さんとは、そのすこし前に電話で話したばかり。突然の死の報せ^{しらせ}には、驚きしかありませんでした。でも、心のどこかで、石井さんはいつか殺されるかもしれない、そんな予感があったのも事実です。

当時、石井さんは民主党の衆議院議員として、オウム真理教による地下鉄・松本サリン事件の被害者救済、統一教会（現・世界平和統一家庭連合）の立ち退き運動への参加、さらに国会質疑でも、日本道路公団や住宅・都市整備公団など特殊法人への不正追及で、注目を浴びていま

した。

人呼んで「国会の爆弾発言男」。

私にとって石井紘基は、恩師であり、正義の人でした。

石井さんの正義にはふたつの大義がありました。ひとつは不正を許さない「不正追及」の正義。もうひとつは弱者に寄り添う「弱者救済」の正義。このふたつを生涯を通じて追い求めた信念の人、それが石井紘基であると今でも思っています。

私と石井さんとの関わりでは、石井さんが最初に衆議院議員選挙の立候補に向けて活動を始めた一九八九年から一九九〇年の一年間がとくに濃密な期間です。私は付き人として一緒に政治活動を行ない、毎日のように顔を合わせていました。九〇年の選挙結果は惜しくも次点。その後私は、石井さんの勧めで司法試験に取り組み、四年後に合格し、弁護士として依頼者のために駆け回ることになります。

ですから、一九九三年の衆議院議員総選挙で石井さんが初当選してからは、国会中継などで石井さんの活躍を目にしましたが、議員となった石井さんが日常的にどのような行動をとっていたのか、すべてをこと細かに把握していたわけではありません。

それでもつきあいは続いていたし、連絡もよくいただいでいました。当時、石井さんは数年

に一回は本を出して、出版記念パーティーを開いていたので、「泉君も買ってよ」と電話がかつてくる。私もカンパのつもりで五〇冊、一〇〇冊と毎回まとまった数を購入したものです。国会での爆弾発言に対して、私が「どこから情報を取っているのですか？」と情報源について聞くと、「なかなか言えないけどな……」と言葉を濁されることもありましたが。本人の口ぶりからも、「危ない橋を渡っているなあ」と思うときもありました。巨悪を倒すため、不正を糾すためには、使えるものはなんでも使う手段を選ばないようなところが見受けられましたから。事の真相に迫るため、多少はダーティーな情報源との接触もあったようです。

石井さんの座右の銘は「不惜身命」でした。命を惜しまず、死をも厭わぬ決意。国を救うためなら「自分の命ぐらいくれてやる」と思える強さがありました。

私も明石市長を一二年務めた最後の年に、殺害予告を受けました。「八月末までに明石市長を辞めなかったら九月で殺すぞ」などの脅迫メールが連日のように送られてきたのです。合計で一四〇通届きましたが、不思議と怖くはありませんでした。

「殺すというなら、殺してみろ」。これで死ぬなら本望だとさえ思っていました。

そう思えたのは、それでも構わないと思えるぐらい、市長としての仕事をやりきった自負があったからです。

一方で、「神様はまだ私を殺さないだろう」との思いもどこかにありました。もし神が存在するならば、私の使命はまだ果たせていないから、次の仕事をさせるだろう。だから、ゆつくりするのはまだ先のことだろうと。

石井さんの最後の日々の心境が、私と同じだったかはわかりません。しかし「もしなにかあったとしても、自分はやりきるんだ！」という覚悟はあったと思います。天が自分に与えた役割を果たそうと、腹をくくっていたと思います。もし躊躇ちゆうちよがあつたら、権力の中枢にまで踏みこめなかつたことでしょう。

石井さんは享年六一。私も二〇二四年八月一九日で同じ六一歳になりました。石井さんが追及していた特殊法人や特別会計の問題は、二二年たつた今も、巧妙に姿を変えつつ、国民のくらしを蝕むしばんでいます。私が常日頃、さまざま媒体で発信しているように、日本の政治はこの三〇年間「無策だった」のではなく、「国民を苦しめ続けてきた」ようなもの。ひどいありさまです。給料は上がらず、税金も保険料も物価も上がり続ける。もはや国民の負担は限界を超えています。

本書の第I部では、石井紘基さんが「官制経済」と喝破した日本の官僚社会主義について、私の知るかぎりの実態を明かしつつ、財務省など中央省庁の問題点にも触れ、最後に、私が構

想している「救民内閣」についても説明します。

第Ⅱ部は、石井紘基さんをよく知る三名との対談です。一人目は、石井さんの一人娘で秘書もされていた石井ターニャさん。二人目は、石井さんとカルト宗教被害者の救済に尽力してきた紀藤正樹^{まさき}弁護士。三人目は、「財政学者」としての石井紘基さんを評価している経済学者の安富歩^{あゆみ}先生。

石井さんの死の真相の究明。そして石井さんが追及していた官僚国家・日本の利権構造。

今から話すのは、二〇年以上前の「昔話」ではありません。まさに、「今を生きる私たちの深刻な問題」です。

みなさんに石井紘基を知っていただき、彼の投げかけた問いに対して、「これから私たちができること」をともに考えていきたいと思います。

目次

はじめに 石井紘基が突きつける現在形の大問題

3

出版に寄せて 石井ナターシャ

8

第I部 官僚社会主義国家・日本の闇

第一章 国の中枢に迫る「終わりなき問い」

18

運命を変えた一冊の本との出会い

「日本は官僚社会主義国家」と喝破した

国会の爆弾発言男

特殊法人とはなにか

誰も知らなかった「本当の国家予算」

会計検査院への失望

国政調査権でタブーに迫る

政治の深い闇

第二章 日本社会を根本から変えるには

バトンを託された思いで国会に立つ

議員になって官僚の実態を知る

財務省対厚労省、抗争の歴史

事業仕分けを主導していた財務省

官僚主権を支える信仰の理由

本当に日本にお金はないのか？

地方交付金の根拠は謎

目の当たりにした国交省内のムダ遣い競争

「火つけてこい！」の背景

明石市に「お金がない」は嘘だった

官僚のムダ遣いを誰も止められない

明治維新から変わらぬ官僚機構

日本人の「お上意識」のルーツ

今必要な「令和の大改革」

歴史的作用を終えた「都道府県」という制度

「廃県置圏」で日本は変わる

中央省庁の再編

財務省から政治の主導権を取り戻す

「救民内閣」構想

「救民内閣」実現へのシナリオ

第Ⅱ部 今を生きる「石井紘基」

第三章

〈石井ターニャ×泉房穂対談〉

事件の背景はなんだったのか？

母のおなかの中で日本に生まれました

娘から見た父・紘基

一九九三年のトップ当選前は極貧状態だった

「不惜身命」の覚悟で生きた石井紘基

事件直前の父の異変

容疑者に会いに拘置所へ

石井ターニャが立候補するんじゃないか？

第四章

〈紀藤正樹×泉房穂 対談〉

司法が抱える根深い問題

普通の国会議員とは明らかに違っていた
今も寄せられる事件の情報

裏金問題につながる司法の闇

オウム事件の坂本弁護士との出会い

より複雑かつ巧妙になった利権の構造

あまりにも後進的な検察の捜査

学者、活動家、政治家——三つの顔を持っていた
政治責任をとらないから決断ができない

「爆弾資料」はなんだったのか？

語り草になった「魂の質問」

遺された資料の電子化プロジェクト

「日本の本当の予算はいくらですか？」

石井紘基の「問い」はまさに「今」を撃つ

第五章 〈安富歩×泉房穂対談〉

「卓越した財政学者」としての石井紘基

日本を「関所システム」という観点から見る

石井紘基の本質は学者

特殊法人のルーツは「満洲国」の公社

受験エリートが支配する国

選挙を取り巻く状況に変化が起きている

今の学校制度がなくなったなら……

国の変化は地方から

孤立せず、ともに攻めていく

石井紘基がもしSNSを使っていたら

おわりに 石井紘基は今も生きている

石井紘基 関連略年表